

教皇来日に寄せて

深堀彩香

FUKAHORI Ayaka

昨秋、38年ぶり二度目となるローマ教皇の来日が実現し、列島各地で盛り上がりを見せた。来日が公式発表されて以降、前回の教皇来日、すなわち、1981（昭和56）年2月に教皇ヨハネ・パウロ二世が来日された際の記録が各メディアで取り上げられた。教皇フランシスコは2019年11月23日（土）から26日（火）までの日程で日本に滞在された。「すべてのいのちを守るため Protect All Life」という公式テーマを掲げ、次のページの表に掲載したスケジュールで各地を周り、メッセージを発信された。¹本稿では、私が参加した11月24日（日）に行われた長崎での教皇ミサを中心に報告する。

教皇ミサへの参加は事前申込制で、長崎大司教区の各教会を中心に九州各地の教会、その他国内巡礼団など全国各地から人々が集った。なかには、より近くで見ることが出来るという理由から東京ドームで行われる教皇ミサではなく、長崎の方に申し込んだ関東方面の信徒もいたという。11月24日当日、ミサ会場である長崎県営野球場・ビッグNスタジアムの開場時間である朝9時に合わせ8時過ぎに到着したが、そこにはすでに長い列ができていた。8時30分を過ぎると小雨が降りだし、ゲートが開

1. 教皇来日公式 HP 参照

く頃には雷雨となっていた。開場時間になりセキュリティゲートを通過するとパンフレット一式、日本とバチカン、現教皇の出身国アルゼンチンの国旗がボランティアの方々によって参加者に配布された。球場内へ入ると、各々割り当てられた指定ブロックへ向かい座席を確保する。野外球場である県営野球場ではセキュリティの観点から事前に傘をさすことが禁止され、レインコートを着用することになっていた。この日、天気予報では一日中雨、降水確率は時間により80～100%であった。気温はあまり下がらないとの予報だったが、パイプ椅子に座りながら長い時間雨風に晒されると体感温度は下がっていく一方であった。それでも多くの信徒は「先祖が経験した苦しみとは比べものにならない。それを思うとこのくらい耐えられる」という思いを抱いていた。強まる雷雨により急遽、ミサ開始前までは傘をさして良いことになったが、なかには「傘禁止」という事前注意事項を読み、傘すら持って来ていないお年寄りが複数みられた。ずぶ濡れになりながらもジッと耐え、教皇ミサを心待ちにしている人々の姿が心に焼きついた。幸い、私の座席近くでは周囲の人が傘を持っていない人に貸したり、屋根のある場所に一時避難したりして、雨を凌いでいた。

月日	場所		内容
11月23日(土)	東京	東京国際空港(羽田空港) ローマ教皇庁大使館	歓迎式 司教との集い
11月24日(日)	長崎	長崎爆心地公園 西坂公園・殉教の記念碑 長崎県営野球場	核兵器に関するメッセージ 日本二十六聖人殉教者への表敬 ミサ
	広島	広島平和記念公園	平和のための集い
11月25日(月)	東京	ベルサール半蔵門 皇居 東京カテドラル聖マリア大聖堂 東京ドーム 官邸 官邸	東日本大震災被災者との集い 天皇陛下との御会見 青年との集い ミサ 首相との会談 要人および外交団等との集い
11月26日(火)	東京	上智大学クルトゥルハイム イエズス会 SJ ハウス 上智大学 東京国際空港(羽田空港)	イエズス会員とのプライベートなミサ 病気・高齢の司祭を訪問 上智大学への訪問 別れの式

同時刻、教皇フランシスコは長崎爆心地公園と西坂公園を訪問された。爆心地公園では長崎県知事および長崎市長に出迎えられ、原爆落下中心地碑の前に献花し、参列していた被爆者をはじめとする関係者らとともに約2分間の長い黙祷を捧げられた。その後、核兵器についてのメッセージを世界に向けて発信され、西坂公園に移動された。西坂公園に到着されると修道者や信徒ら約900名の歓迎を受け、日本二十六聖人の記念碑の前に献花し、二十六聖人の聖遺物に献香された。教皇は殉教者への敬意を表しつつ、信仰やいのちについて語られた。

正午近くになると、徐々に雨が弱まって傘も必要なくなり、ミサが始まる頃には青空と太陽が顔を出した。野球場はボランティアスタッフ約2,000人と国内各地から集まった合計3万人超で埋め尽くされた。会衆の中には天正遣欧少年使節の一人である中浦ジュリアンの縁者、小佐々学さんや、長崎市下黒崎町のかくれキリシタンの帳方、村上茂則さんの姿もあった。午後1時30分

頃、専用車「パパモービル」に乗って教皇が入場されると大きな歓声があがった。ひとつひとつの歓声に応えるように笑顔で会衆に手を振り、時折、幼い子どもたちに祝福しながら会場をゆっくりと一周された。午後1時50分頃、先程までの割れんばかりの歓声が嘘のように静まり返り、この日の典礼である「王であるキリストの祭日」のミサが厳かに始まった。祭壇には被爆マリア像が安置され、教皇の他、バチカン随行団、日本司教団、司祭団、侍者、典礼奉仕者など200名超が並び、約900名の聖歌隊によって荘厳にミサが執り行われた。ミサの式文はラテン語と日本語、説教はスペイン語で行われた。教皇は説教の中で「この国は、人間が手にしうる壊滅的な力を経験した数少ない国の一つ」と述べられ、平和について語られた。かつて西坂で殉教した聖パウロ三木ら殉教者のキリスト者としての歩みに触れられ、自らのいのちをもって救いと確信をあかした彼らの足跡に従い、キリストから約束された愛を实践するよう励ま



雷雨の中、ミサ開始を待つ参加者

された。そして、説教の最後には次のように呼びかけられた。

長崎はその魂に、いやしがたい傷を負っています。その傷は、多くの罪なき者の、筆舌に尽くしがたい苦しみによるしるしです。これまでの戦争によって踏みにじられた犠牲者たちは、さまざまな場所で勃発している第3次世界大戦によって、今日もなお苦しんでいます。今ここで、一つの祈りとして、わたしたちも声を上げましょう。…自ら声を上げ、真理と正義、聖性と恵み、愛と平和のみ国を告げ知らせる者が、もっともっと増えるよう願いましょう。²

その後の共同祈願はスペイン語、韓国語、タガログ語、日本語、ベトナム語で行われた。ミサの最後には長崎大司教区の高見三明大司教が教皇の長崎ご訪問と、全世界に向けて核廃絶と平和の強いメッセージを発信してくださったことへの感謝を述べられた。

2. カトリック中央協議会 HP (<https://www.cbcj.catholic.jp/2019/11/24/19822/>) より

ミサが終わると教皇は空路で次の訪問地である広島に向かわれた。その頃には真夏を思わせるほどの強い日差しが降り注ぎ、雲ひとつない青空となっていた。午前中の雷雨からのあまりにもドラマチックな展開に、禁教や被爆といった暗く苦しい時代から信仰の自由と平和が訪れた今日までの長崎の歴史を物語るようだという声も聞かれた。帰路につく参列者の顔は充実感に満ち晴れやかだった。場外では長崎新聞の号外が配られ、人々が群がっていた。翌日の



パパモータービレから手を振る教皇 ©CBCJ



11月24日(火)『長崎新聞』号外1面

長崎新聞にも教皇の長崎での言動が詳細に掲載された。

盛り上がりを見せた教皇の来崎であったが、長崎県内ではそれにあわせて主に以下のような催しも行なわれた。このうち、実際に足を運んだ3つの展示について報告する。

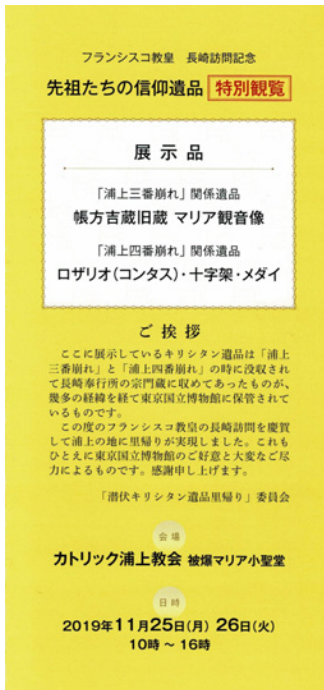


赤ちゃんにキスをする教皇 ©CBCJ

カトリック浦上教会の被爆マリア聖堂では、長崎での教皇ミサの翌日から二日間、『先祖たちからの信仰遺品 特別観覧』が催された。ここで言う「先祖」とは浦上の潜伏キリシタンのことで、特に幕末に起きた浦上三番崩れ、四番崩れ（キリシタン摘発事件）の先祖を指す。この「崩れ」の際に長崎奉行所が浦上の潜伏キリシタンから没収した物のうち約280点を東京国立博物館（以下、東博）が収蔵しており、教皇来崎にあわせ

場所（五十音順）	期間	催し名
浦上キリシタン資料館	2019年10月10日～2020年1月中旬 ³	二人の教皇展
カトリック浦上教会被爆マリア小聖堂	2019年11月25日～11月26日	フランスコ教皇 長崎訪問記念 先祖たちからの信仰遺品 特別観覧
長崎原爆資料館	2019年11月16日～2020年3月31日	企画展 ローマ法王からの平和のメッセージ ジョー・オダネル氏撮影写真とともに
長崎県美術館	2019年11月12日～2020年1月13日	ローマ法王来県記念・世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」登録記念 特別企画展 長崎とキリスト教
長崎歴史文化博物館	2019年11月9日～12月7日	特別企画展 日本の聖母マリア像展—東京国立博物館所蔵キリシタン関係遺品を中心に

3. 好評につき、2020年2月末まで延長された。



て同教会で展示できるよう東博に要望し、信仰具5点の里帰りが実現した。浦上信徒向けの特別観覧として企画されたこの展示は事前申込制であった。当日は厳重なセキュリティの中、展示会場の被爆マリア聖堂に5名ずつ入るといった形で観覧が実施された。展示品の数は少ないもののいずれも保存状態が良かった。しかし遺品自体の価値以上に、浦上の地に戻って来たということが浦上潜伏キリシタンの末裔である信徒達にとっては意義深いものであったように思う。二日間の展示後、信仰具5点は2019年11月27日から長崎歴史文化博物館の「日本の聖母マリア像展」において一般向けに展示された。

その長崎歴史文化博物館で開催された「日本の聖母マリア像展」では、キリシタンと聖母マリアの関係に焦点があてられ、東博が所蔵するキリシタン関係遺品の聖母マリアに関する聖画の他、マリア観音や生月島

のかくれキリシタンが御神体とする「お掛け絵」等が展示されていた。テーマが非常にわかりやすく、キリシタンたちの聖母マリアへの崇敬、敬愛が感じられる内容であった。今回のテーマに合致するようなキリシタン関係遺品が多数存在するだけに、この特別企画展の規模が思っていたよりも小さかったことが悔やまれる。同様のコンセプトでもう少し大きな展覧会が企画されれば必ず足を運びたいと思うほど、内容は非常に興味深く面白いものであった。

長崎県美術館では、ローマ教皇の長崎来訪と世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」登録を記念し、特別企画展「長崎とキリスト教」が催された。そこでは、長崎とキリスト教との関わりをテーマに制作された舟越保武、東松照明、小川緑の作品が紹介されていた。長崎の報道番組でも取り上げられていたので足を運んだが、テーマが大きい一方で展示品が数点であったため、散漫な印象を受けた。もっと焦点を絞り、内容を凝縮させるべきだっただろう。

上記3ヶ所の展示を見て思ったのは、有料でも良いのでもっと大きな規模の企画が出来なかったのだろうかということである。長崎県内では約1年前から教皇来崎に向けて盛り上がりを見せ、メディアでも取り上げられるようになり、教皇来崎前後には県内外からの人出も予想され、期待感が高まっていた。そうした中で特別企画展である。自身の期待が大きかったのかもしれないが、展示内容と自身の熱量に差があることを痛感した。無料観覧にもメリットがあり、もちろん企画する側にも準備等様々な事情があることは承知の上で言うが、教皇来日、来崎の貴重さとその意義を考える時、長崎の歴史が改めて注目されている中で



©CBCJ

県内外の人に長崎の文化施設としてもっと伝えられることがあったのではないかと感じた。

教皇の日本滞在中、メディアは連日、教皇の動向や発言を取り上げていたが、宗教団体の最高指導者としての顔よりも国家元首として国際政治の側面から報道される傾向が強いと感じた。これはメディアとしてごく自然な取り上げ方なので問題ないのだが、長崎で野外ミサに与った際に宗教的場面で商業的な動きを感じ、違和感を覚えたことも否めない。東京で開かれた青年の集いや東京ドームでのミサに参加した数名のカトリック信徒からも同じような声が聴かれた。これは受け入れる日本側の体制の問題だったのかもしれない。さかもと未明氏は教皇の訪問日程を「命を削るスケジュール」と表現しているが、まさしくその通りで、82歳（来日当時）とは思えないほど分刻みのスケジュールを「こなす」のではなく、ひとつひとつ丁寧に取り組まれていた姿が

印象に残っている。教皇の真摯な姿と真っ直ぐなメッセージが心に刻まれただけに、祈りの場において商業的臭いがしてしまったことが個人的には非常に残念であった。

ともあれ、今回の訪日で教皇が発信した力強いメッセージは、宗教を問わず、多くの人々の共感呼んだ。「最初は綺麗事ばかり言う人だと思っていたが、訪日に際しての教皇の言動を見ると、その綺麗事が本当に実現できるかもしれないと思えてくる」というような一般の意見も聞かれた。日本のメディアで宗教が取り上げられることは珍しく、日本人の中にも宗教を忌避する人が一定数いるなかで、批判的な声がほとんど聞かれず、むしろ好意的な声が多かったのは現教皇のなせる業とも言えるだろう。

しかし、あれだけ連日テレビや新聞を賑わせていた教皇訪日のニュースも、今となっては遠い過去の出来事のように感じる人も少なくないだろう。長崎大司教区の高見三明大司教は、2020年の神の母聖マリアの祭日（1月1日）のミサの中で、教皇訪日

を一過性の出来事にするのではなく、教皇様から受け取ったメッセージの意味をしっかりと考え、行動していく一年にしていきましょうと語られた。また、同日付の『カトリック教報』の「2020 年年頭教書」においては、「教皇様は、はるかローマから長崎に来られ、感動的な出会いと力強く知恵に満ちたメッセージを残してくださいました。今後日本の教会と共にそれにこたえていきたいと思えます。」⁴と述べられている。以降、『カトリック教報』では毎月「教皇来崎からの始まり」というタイトルで司祭たちによ

4. 『カトリック教報』第 1078 号、カトリック長崎大司教区広報委員会、2020 年 1 月 1 日

る記事が掲載され、大司教区の信徒が教皇来崎の意味と教皇のメッセージについて継続して考えられるような取り組みがなされている。

教皇が命懸けで伝えに來られた「すべてのいのちを守るため」というメッセージに、私たちはこれからどのようにこたえていくか。世界中が混乱し、冷静さが失われ、何が正しいのかさえわからなくなってきている中で、一人一人が今一度いのちについて考え、生かされている命をどのように生きるかを見つめ直す時が来ているのかもしれない。

ふかほり・あやか
南山宗教文化研究所非常勤研究員